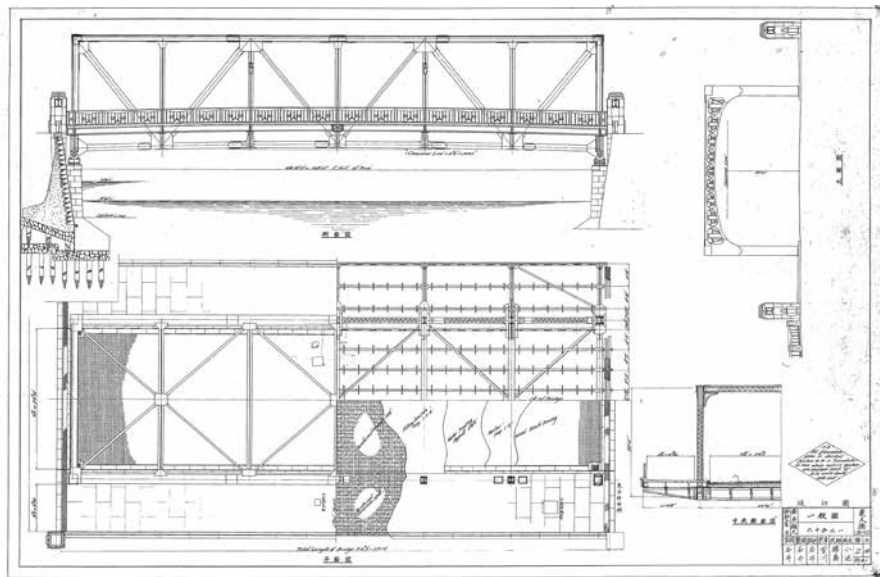


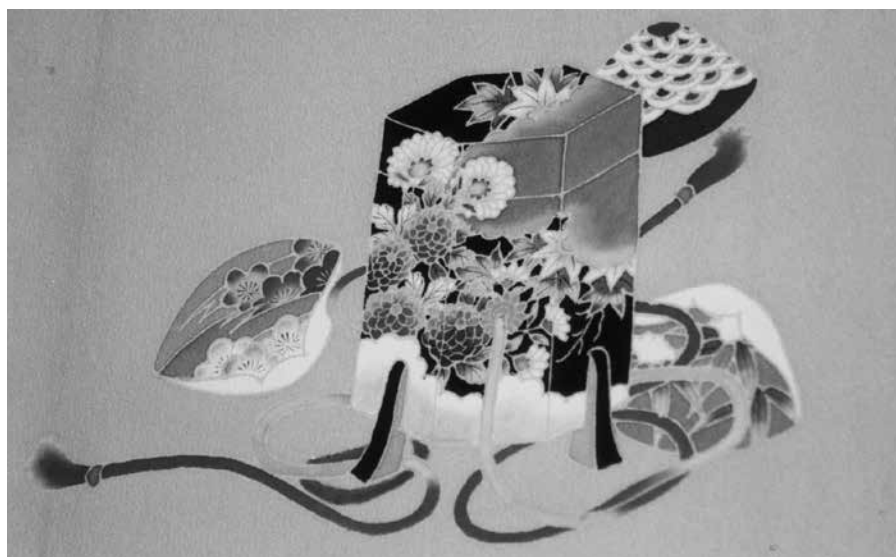
◆平成26年度新指定文化財◆

震災復興橋梁図面 手描友禅

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長 中村ひろ子：元神奈川大学教授)の答申を受け、新たに2件を指定、7件を登録しました。また、1件を解除したため、登録文化財の総数は1058件となりました。



昭和3年「亀久橋 一般図」



手描友禅

下町文化

NO. 269
2015.4.24

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.jp/g.jp/>

- 平成26年度
新指定・登録文化財紹介
- 平成26年度 中川船番所特別企画展
「かえってきた羅漢さま」関連
五百羅漢寺は
なぜ大島に創建されたのか
- 江東区芭蕉記念館特別展
連歌・俳諧から近代俳句へ
一宗祇・宗鑑・芭蕉・蕪村…子規、
その時代の継承者たち
- 区外史料調査報告
江東区域の加賀藩前田家屋敷
- 文化財まめ知識④
江東区内の石

文化財をもっと身近に

4月も後半に入ると、日いちにちと暖かさが増し、いよいよ春らしい陽気になってきました。区内各所の河川沿いなどを彩る桜の季節は終わりましたが、植物が芽吹き、さまざまな花が咲く春は、心も浮きうきしてきますね。もうすぐゴールデンウィークです。旅行に出かける方も多いと思いますが、天気がいい日は近所を散歩するのも面白いと思いますよ。

普段あまり通ったことのない路地を歩いてみると、新たな発見があるかもしれません。そこに一個の石造物を見つけたら、そしてそれが古そうであれば、少し立ち止まって見るのも一興かと思えます。もしかしたら、江戸の昔からそこにあったものかもしれません。歴史に触れた瞬間です。

文化財というと少し難しく考える方も多いことでしょう。でも、いつも通る路の端、あるいは公園など、普通に利用する場にも多く残されていることをご存じですか。文化財を身近に感じ、まずはどんなものがあるのか興味をもっていただけると有り難いですね。今年もいくつかの文化財が指定・登録されました。2・3頁で紹介していますので、まずはご一読ください。

指定文化財

【有形文化財（歴史資料）】

震災復興橋梁図面 901枚

東陽4―11―28 江東区

関東大震災直後の大正12年（1923）

から昭和5年（1930）にかけて帝都復興事業の一環として架設された橋梁の図面です。震災前の東京市における橋梁は木橋・鉄橋とありましたが、鉄橋であつても木造部分が多かつたため、震災の影響で発生した火災のために多数の橋梁が被害を受けました。そのため、復興橋梁はすべて耐震耐火構造とする計画でしたが、予算上の問題などから隅田川左岸地域の本所区・深川区では多数の木橋が架設されました。東京市では8年間に425橋が架設され、江東区域では208橋が架設されました。そのうち132橋分の図面がありますが、残っている図面の枚数・種類などは橋によって異なります。

震災復興橋梁は、河川や堀の埋め立て、耐用年数や耐震上の問題などから撤去・架け替えが行われています。架設当初の姿を残している橋梁は年々減少しているため、建設当初の構造が判明する図面は貴重な資料です。また、図面に記載されている情報から、建設計画、設計の考え方などをうかがえるほか、他の関連資料とあわせることで、

当時の設計・施工技術や体制などに関する手がかりを得られるため、土木史研究における資料としての価値もあります。さ

らに図面から当時の町並みや橋の意匠がわかるなど都市景観を知る上でも有益な資料です。



震災復興橋梁図面と保管ケース

【無形文化財（工芸技術）】

手描友禪

保持者 和田宣明

友禪染という京友禪・加賀友禪、そして東京友禪がいられています。17世紀末に京都の扇工宮崎友禪によってはじめられたという友禪染は、後に金沢で晩年を過ごした友禪の指導により加賀でも盛んになりました。江戸へは文化文政頃（1804―30）に伝わったといひ、好みとされています。

手描友禪は手描きによって着物の文様を描く技術です。筆でそのまま生地の色を挿すのにじんでしまうので、まず糊を文様の輪郭線にのせておきます。そうすると糊の土手により色とまり、にじまなくなります。このやり

方（のりおきほう）を糊置防染法と呼びます。また筆を用いてぼかしを入れるなど、繊細な筆づかいで細かく複雑な彩色をほどこします。

和田氏は、昭和6年に新大橋に生まれ、23歳頃から義理の叔父で友禪職人の冨塚呉丘氏（明治33年生まれ）のもとで修業し、昭和38年頃に清澄で独立しました（後に亀戸に移転）。文様・配色に絵師としての技量が問われる伝統的な手描友禪の技法を守りながら、50年以上にわたり仕事を続けています。



和田宣明氏

登録文化財

【有形文化財（建造物）】

石造燈籠 昭和8年在銘 一對

亀戸3―38―35 天祖神社

天祖神社の創立された年代は不詳ですが、社伝によると推古天皇の時代の創建とされています。江戸時代には砂

原神明宮と称し、柳島村の総鎮守でした。

この一對の燈籠は、昭和4年（1929）の社殿建設を受けて昭和8年に奉納されたものです。当初は社殿の前に設置されましたが、昭和38年に奉安殿が建設された時にその前へ移されました。さらに台石として基礎（中・下）と基壇、追刻の銘板が製作されて現在に至っています。刻銘からは旧小字名である砂原、町会名の宮元といった現在の亀戸3丁目付近に縁のある地名などが確認されます。本燈籠は神社への信仰だけではなく、神社と住民のつながりが示されている文化財です。



石造燈籠 昭和8年
在銘 一對

石造鳥居 昭和5年在銘

亀戸3―38―35 天祖神社

天祖神社の境内社、太郎稲荷神社の参道最前列に位置する神明形の鳥居です。昭和5年（1930）6月4日に近隣の亀戸コークス合名会社敷地内の稲荷社に建立されたのですが、戦後、太郎稲荷神社参道に移設されたといわれています。



石造鳥居 昭和5年在銘

【有形文化財（彫刻）】
石造狛犬 昭和5年在銘 一対
亀戸3—38—35 天祖神社

昭和4年（1929）に建造された社殿の造営記念として奉納された狛犬で、社殿前方の階段の手前に位置します。台石にある刻銘の「柳島元町」は



石像狛犬 昭和5年在銘 一対



当時の本所区の町名で氏子域のひとつ、「柳嶋本村」は柳島村の小名「本村」を指すものと推測され、行政区域を超えて信仰されていたことがうかがえます。

【有形文化財（歴史資料）】
天祖神社社号標石 大正5年在銘
亀戸3—38—35 天祖神社

入口付近の参道右脇にあり、基壇まで含めた高さは約4m50cmです。刻銘にみられる「田中安宣」は、明治42年（1909）から天祖神社の宮司として奉仕しましたが、それ以前は白山神社（文京区）に奉仕していました。寄進者に小石川・駒込・本郷・湯島などの人物が多くみられるため、本社号標石の建造には、安宣の白山神社奉職時に関係のあった人々の後援があったものと推測されます。当時の天祖神社は、氏子域を超えた地域と繋がりを持っていたことがうかがえます。



天祖神社社号標石

境内社太郎稻荷神社社号標石 昭和18年在銘
亀戸3—38—35 天祖神社

昭和18年（1943）3月に本所区錦糸町北部睦会によって建立されました。

た。天祖神社は江戸時代、柳島村の鎮守として周辺地域の信仰を集めていました。昭和7年以降、本所区と城東区の設置により氏子域が行政区画上是分かれても、本社・境内社ともに引き続き信仰されていたことがうかがえます。



境内社太郎稻荷神社社号標石

琴臺東條先生之碑
亀戸3—38—35 天祖神社

江戸後期から明治初期の儒学者東条琴台（1795—1878）を追悼して建てられた石碑で、琴台臨終の作詩歌2首が刻まれています。建立者は天祖神社社掌高橋信盛で、明治17年（1884）には谷中天眼寺（台東区）にも「琴台東條先生見祠」を建立するなど、両者には交流があったことがうかがえます。



琴臺東條先生之碑

うかがわれます。琴台は明治5年には亀戸神社（亀戸天神社）の祠官を務めたこともありま。

【有形民俗文化財】
水盤 明治42年在銘
亀戸3—38—35 天祖神社

明治42年（1909）4月、亀戸一帯の芸妓屋・料理屋などが境内社太郎稻荷神社に奉納した水盤です。銘文には「鯰家」「鮎林」「亀川」など江戸時代以来の老舗料理屋の名前もみられ、亀戸が行楽地として歴史的に繁栄していたことを伝えています。



水盤 明治42年在銘

登録解除

【無形文化財（工芸技術）】

仕舞袴製作 保持者 杉浦武雄

名称変更

【有形文化財（彫刻）】

銅造二童子像

富岡1—17—13 深川不動堂

五百羅漢寺はなぜ大島に創建されたのか

前号で報告しました、特別企画展「かえってきた羅漢さま」開催にあたり、「おや？」と思うことがありました。①羅漢寺が創建された元禄8年（1695）は、すでに新規寺院の建立が禁止されていた時代だったのに、幕府はなぜ大寺院を大島の地に建立したのか。②羅漢寺が創建された大島村は「本所五つ目」と呼ばれているが、大島を本所というのには違和感がある。この2つの疑問について、考えてみましょう。

1、寺院の創建

元禄の頃、京の仏師だった松雲禪師が、五百数十体の羅漢像を木造で製作することを発願し、浅草蔵前の豪商のバックアップや5代將軍徳川綱吉と生母桂昌院の後押しもあって、大島村の「本所五つ目」と呼ばれたこの地に寺地が与えられ、年代を追うごとに壮大な羅漢堂や本堂が建立されました。

2、本所の開発

明暦3年（1657）1月の明暦の大火後、江戸市街地を拡大させるために、本所の開発が行われました。

本所の開発は2期に分かれます。第1期は大火直後から天和2年（1682）で、江戸最初の目抜き通り、本町の通りの延長線上に両国橋が架けられ、隅田川対岸（川向う）で生活することになる幕府直属家臣としての旗本・御家人の屋敷街Ⅱ本所が、歩いて行ける場所になりました。

本所の地割は豎川・大横川・横十間川を開削し、並行して碁盤の目状に街区を設定し、個々の旗本や御家人に屋敷地が割り当てられました。そして最も奥まった横十間川の東側に亀戸天満宮が造営されました。

しかし天和2年、幕府は度重なる大水で排水の便が悪かったことから開発を一時断念します。移転してきた武家を江戸市中に戻すという、「本所撤退」に踏み切りました。

その上で幕府は2度目の開発に着手します。南北2本の割下水を開いて排水路とし、改めて道路を整備するなどして地盤整備を行いました。その過程で東部にあたる亀戸・大島方面は武家地に野菜を供給するための近郊農村として位置付けられ、豎川に架かる五之橋・六之橋は廃止になりました。第2期工事の完了は元禄2年（1689）です。前年には本所上水が引かれ、武

家の再移転が始まりました。同6年の新大橋架橋や後年の本所御竹蔵の米蔵化はこうした流れの中に位置づけることができます。

さらに8代將軍吉宗の時代、本所周辺で鷹狩がさかに行われました。隅田川・向島・中川・葛西辺が鷹場となり、日帰りで開かれることが多くなりました。これらの本所開発事業は、新たに隅田川以東に移転させられ、新たな幕府家臣団屋敷地として設定された本所に暮らすこととなった旗本・御家人にとって、將軍家との一体化、連帯を意識させることとなりました。

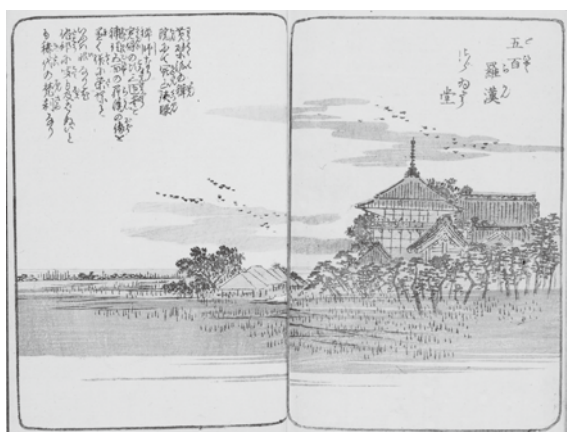
3、羅漢寺創建の意味

羅漢寺は黄檗宗の寺院です。新興宗派であつた黄檗宗は、江戸初期に中国の僧・隠元禪師によって長崎にもたらされました。こうした中国文化が横溢する黄檗宗寺院が新武家地・本所にもたらされたのです。吉宗の時代にはオランダからもたらされた西洋画が、同寺に寄贈されています（現存せず）。

羅漢寺はその異国情緒が垣間見られる堂宇と堂内の荘厳さ、新興宗派としての珍しさなど、それまでになかった「異色の寺院」となりました。本所の新たな「信仰と異国情緒・文化を味わう場」となりました。幕府が独占的に掌握していた海外貿易や西洋文明を体感できる場と

なったことも、「本所の価値」を高めることになりました。これが羅漢寺創建の背景ではなかったかと考えます。

豎川以北の西半分が武家地として整備され、東側の亀戸全域と大島北半分が近郊農村となり、それらの地域を囲むようにして鷹狩が行われ將軍がたびたび訪れる場所となり、内部に幕府主導で天満宮と羅漢寺が創建されたことで、特別な「本所地域」が形成されました。土地の開発による区画設定や境界設定、村・町の成立とは異なる、「概念としての本所」が生まれた瞬間でした。この政策的意図とは別に五百羅漢寺が、江戸を代表する名所となったことは言うまでもありません。



『絵本江戸土産 五百羅漢さざめ堂』

◆連歌・俳諧から近代俳句へ

—宗祇・宗鑑・芭蕉・蕨村・子規、その時代の継承者たち—

4月23日(木)～6月21日(日)まで

俳諧とは「俳諧之連歌」のことで、その源流を辿ると、連歌ということになります。俳諧は、俳も諧も「滑稽」「戯れ」という意味です。

近世俳諧は、荒木田守武と宗鑑(洛西山崎に住したことから山崎宗鑑と通称)を始祖とされています。その後、俳諧は松永貞徳の貞門調から西山宗因の談林調、そして松尾芭蕉の蕉風への流れとなり、芭蕉によって俳諧は文学の領域へと高められることになりました。

しかし芭蕉没後の俳諧は、江戸の場合、江戸座の中で点取宗匠の勢力を二分していた其角系と沾徳系の俳諧集団が主流であり、嵐雪系・杉風系・素堂系の各集団(非主流)は十分な基盤を確立できないままにいたとされています。世情では博奕的な俳諧が流行し、俳諧は次第に低俗化する傾向にありました。

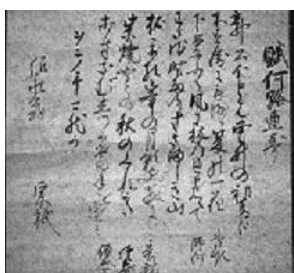
その後、享保期に佐久間柳居などが「五色墨」運動を展開し、俳諧中興期の蕉風復興運動の先駆的役割を担うようになります。さらに宝暦から天明期

にかけての時期では、京都の蝶夢、加賀の闌更、信濃の白雄、尾張の暁台、京都の蕨村らによって「芭蕉に帰れ」の名の下に、蕉風復興運動の機運が高まってきました。

その時代を過ぎると俳諧は、再び低俗的な月並俳諧の時代を歩むことになります。明治初期は、その系譜を引く旧派の一派が俳壇の中心でした。

しかしこの頃から、ようやく俳諧の革新的な流れが見られるようになり、正岡子規の登場によって、近代俳句の時代が到来することになります。

それでは、今回の主な展示資料を紹介します。芭蕉が崇高した人物の一人に飯尾宗祇がいました。宗祇は室町時代の連歌師で、旅の詩人として知られます。展示



飯尾宗祇筆「賦何路連歌」

の「賦何路連歌」は、年月日が不記載のものですが、最近の研究成

果で『美濃千句』第四初折の七句目までを書き、本状の執筆は第四の興行日の文明4年(1472)12月18日以前のものでとされます。また、宗祇の弟子の柴屋軒宗長の新又四郎(詳細不明)に宛てた書簡も併せて展示します。

通称、山崎宗鑑は、近世俳諧の始祖と言われる人物です。展示の宗鑑筆「風雨」書幅は、揮毫した人物が記されていますが、これを歌学者の北村季吟が宗鑑の書として極め書きしたものです。

また、談林俳諧の祖西山宗因の「小屋なれど」句短冊は号に「一幽」を用いていますが、宗因がこの「一幽」と揮毫しているのは極めて珍しいものとされています。さらに元禄4年(1691)9月24日付の曲水(翠)あての芭蕉書簡は、平成16年に新出資料として新聞報道され、話題になりました。

山口素堂と大淀三千風は、蕉門外の二巨星の俳人で知られる人物です。そのうち三千風の「射和境地縁起」巻子は、天和4年(1684)のもので、『日本行脚文集』の旅中(天和3年～元禄2年)の天和3年10月に伊勢国飯野郡射和村(現、三重県松阪市)に帰省した際に、その時のことを書き連ねたもの。『日本行脚文集』にはこの時のことを伝え、「予も縁起一軸す、」とあり、その記述の巻子と思われる貴重な資料です。

蕉風復興運動からそれ以降の時期は、与謝蕨村・蝶夢らを中心に、加藤暁台書簡・三浦樗良の「菊の花」自画賛・松岡青蘿の「薺つむ」句短冊・藤森素檠の「覚へたる」句自画賛の4点を初公開です。



藤森素檠「覚へたる」句自画賛

そして明治期の旧派の俳人から秋声会・筑波会・日本派の俳人を紹介しながら、夏目漱石・正岡子規へと至ります。



正岡子規筆「家五百」句短冊

今回の展示は、連歌から俳諧、そして近代俳句に至る時代を俯瞰できる人物・作品を取り上げています。展示資料は全体で52点、うち6点が今回公開となります。この機会に、時代の継承者たちの展示をじっくりとご覧ください。

なお、「俳文学者の写した『おくのほそ道』—久富哲雄のファイندرを通して」の写真展も引続き開催しております。

【芭蕉記念館 問合せ】

☎03(3631)1448

江東区域の加賀藩前田家屋敷

江戸時代の江東区域は多くの大名屋敷が所在したことで知られています。そのなかには「加賀百万石」で有名な加賀藩前田家の江戸屋敷もありました。平成25年度の区外史料調査では、この加賀藩前田家江戸屋敷に関する史料を中心に金沢市立玉川図書館近世史料館で調査を行いました。

江東区域の加賀藩江戸屋敷

江東区域の前田家屋敷は「永代島邸」「^{ほうくじま}砲礮島邸」「深川邸」「深川黒江町蔵屋敷」の4ヶ所がありました。これらはいずれも^{かかえ}抱屋敷（大名が自ら入手した屋敷、幕府から与えられた屋敷は「拝領屋敷」という）です。この4邸のほかに区外も含めた前田家江戸屋敷全体の沿革をまとめた史料が『東邸沿革図譜』（文政6年（1823）、以下『図譜』と略）です。著者の加賀藩士富田景周は同藩の歴史地理に精通し、藩の歴史書『越登賀三州志』（以下『三州志』と略）なども著しています。この二書をもとに、各藩邸の沿革を整理してみましよう。

永代島邸

永代島邸は、仙台堀沿い北側で、のちに十万坪といわれる地域の近く（千石1付近）に所在しました。開設時期は当時の史料がないため、はっきりとはわかりませんが、『図譜』によると、

江東区内の加賀藩前田家江戸屋敷一覧

No.	屋敷名	年代	種類	面積
1	永代島邸	慶長10?～貞享3	抱屋敷 (蔵屋敷→別荘)	37,114坪?
2	砲礮島邸	明暦3?～貞享3	抱屋敷	約23,000坪?
3	深川邸	寛文期?～貞享3?	抱屋敷	32,292坪
4	深川黒江町蔵屋敷	慶安4～明治初期	抱屋敷(蔵屋敷)	2,668坪

『東邸沿革図譜』（史料番号特 16.18-128）をもとに筆者作成。

「?」記号は異説があることを示しています。

No. は下掲絵図中の指示番号に担当します。

屋敷の設置年代はあくまで『東邸沿革図譜』によるものです。当該地域は江戸期の埋立地ですが、埋立時期には諸説あります。

慶長10年（1605）に前田家が幕府から上屋敷（千代田区大手町1・2付近）を拝領したのと同じ頃に入手したとしています。ただし、『三州志』では元和初年（1615頃）としています。これらの開設年代は江東区域の埋立年代と比べても早期にあたるため、詳細は今後の検討を要しますが、いずれにしても区内の加賀藩邸では最も早く設置された藩邸と認識されていたようです。

永代島邸の機能は、当初は江戸における物資貯蔵のための蔵屋敷で、特に米蔵が置かれていたようです。この場所に蔵屋敷が設置された理由は、当時は屋敷付近が江戸湾沿岸部にあたり、水運の便が良かったためだそうです。のち慶安4年（1651）に米蔵の機能は深川黒江町屋敷に移されることになり、永代島邸は別邸（別荘）になったとされます。屋敷地のすぐ南が海を臨む景勝地でもあったためでしょう。

しかし、『図譜』『三州志』には明暦3年（1657）の江戸大火で屋敷が被災したとあり、延宝8年（1680）には幕府に収公されることになりました。この頃には土地は「荒地」となっていたようです。さらに、屋敷南側の埋め立てが進み、景観が悪化していたとも記されています。

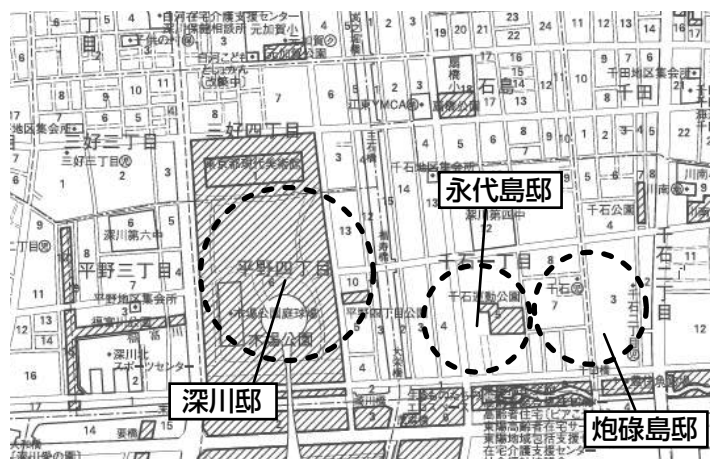
ちなみに同じ頃、前田家は平尾邸下屋敷（板橋区）を拝領した上で隣地を購入して拡張し、別荘として整備しています。つまり、永代島邸の別荘としての機能が、延宝の幕府収公を機に平尾邸に移ったといえるでしょう。

ただし、実際に幕府が永代島邸の屋敷地を収公したのは、6年後の貞享3年（1686）でした。これは土地が荒れていたため、代わりの請人（管理者・納税者）が選定できなかったことが理由とされています。そのため、収公の命令が下されたにもかかわらず、前田家は年貢を納め続けたのです。武家であっても年貢地（課税地）を購入



『東邸沿革図譜』（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）延宝6年江戸絵図写部分

入すると納税義務が課されました。前田家はその負担を嫌って幕府に掛け合い、正式に土地を上納したのです。



屋敷位置の推定は『東邸沿革図譜』によるものです。

砲礮島邸
砲礮島邸は永代島邸と同じ、のちの十万坪近くの土地（千石1・2付近）に置かれた抱屋敷です。その詳細はわからず、開設年代も不明ですが、『図譜』では明暦3年（1657）の大火で被災したという記録がないことから、当時は建物が建っていないなかったか、大火後に屋敷地となったのではないかと推測しています。

立地環境は、永代島邸の東側に位置

し、当初、南は海に面していたと考えられますが、永代島邸と同じく貞享3年4月に幕府に上地されました。

敷地内に建物が無かった可能性が指摘され、隣接する永代島邸が別荘となっていた時期に購入されたとも推測されていることから、庭園として利用されたとも考えられますが、現在のところ確かなことはわかりません。

深川邸

深川邸は、砲礮島邸の西方（平野4付近）に所在した抱屋敷で、当初、北は水野家屋敷、南は海に面していました。開設年は不明ですが、寛文期（1661〜73）の江戸図に屋敷地の区画が図示されていることから、『図譜』ではこの頃には屋敷地となっていたのではないかと推測しています。

また、閉鎖は永代島・砲礮島邸と同じ貞享3年の幕府上地の時と考えられます。しかし、深川邸には不思議な点があり、その後に発行された江戸図に引き続き同所が加賀藩邸として記載されているのです。このことから、『図譜』は江戸図の記載がなくなる享保12年（1727）以降に廃止されたと推定しています。

なお、この「廃止された屋敷が江戸図に記載される」という現象は永代島邸にもみられ、元禄時代（1688

〜1704）の江戸図に「マツダイラカ」（松平加賀前田綱紀）屋敷が記載されています。しかし、実際は収公されてなくなっており、『図譜』でも「此処二公ノ名ヲノスル者不審也、按ルニ是画工ノ誤リナルヘシ」と誤りを指摘しています。このことは江戸の地図を読む上で、記載情報に誤謬がある可能性と、情報の「裏付け」をとる必要性を示唆しています。

こうしたことから、深川邸が存続していた時期や建物の有無などについては今後の検討が必要です。

深川黒江町蔵屋敷

深川黒江町蔵屋敷は、その名の通り深川黒江町（門前仲町1）に所在した抱屋敷で米蔵が置かれていました。『図譜』では明暦3年3月に土地を購入して米蔵を置いたとありますが、注記として土地は慶安4年（1651）に購入しており、米蔵ができたのは明暦の大火後の万治元年（1658）とする異説も紹介しています。

いずれの説が正しいのかは判然としませんが、永代島邸が被災した明暦大火後に黒江町屋敷へ米蔵の機能を移転する整備を行ったことが推測されます。

前出の3邸が近世中期には廃止されたのに対し、黒江町蔵屋敷は明治維新

まで存続し、前田家の江戸における貯蔵施設として利用され続けました。

現在、近世史料館に残されている史料もほとんどがこの黒江町蔵屋敷に関するものであり、江戸後期の絵図面などが複数保存されています。



以上、本稿では調査で確認された史料をもとに加賀藩前田家の屋敷について概説しました。調査史料のすべてを紹介することはできませんでしたが、その成果はまた別の機会にご報告したいと思っています。

【参考文献】富田景周著・日置謙校『越登賀三州志』（昭和8、石川県図書館協会出版）。金沢市立玉川図書館近世史料館『加賀藩の江戸藩邸』（平成13）。『金沢市史』通史編2 近世（平成17）。

（文化財専門員 斉藤照徳）

江東区内の力石



力石とは、力持ち（力くらべ）で用いられた石のことです。力持ちは神社の祭礼などで出し物として行われました。その多くは卵型で、表面に凹凸が少ない60〜200キロ程度の自然石です。これらの多くは、力持ちを行った神社へ奉納されています。

※

歴史的には、戦国時代に描かれた屏風絵「上杉本 洛中洛外図屏風」（米沢市上杉博物館蔵）の中に石を持ち上げる人たちの姿が見えます。また、力石の名は、17世紀初頭の辞書（『日葡辞書』）に見られ、力試しをする石という説明があります。



①力石 寛文4年在銘 志演神社

力石は全国的に分布し、特に関東地方・東海地方で多く見られます。江東区では、99個の力石が登録有形民俗文化財になっていますが、その内、志演神社（北砂2）の力石が最も古く、寛文4年（1664）の年号が刻まれて



②力石 10個 福住稲荷神社

います（①）。区指定文化財でもあるこの力石は、全国的に見てもかなり古いものです。このほか、区内で多く残されているのは、富賀岡八幡宮（南砂7、17個）、中田稲荷神社（東砂5、12個）、福住稲荷神社（永代2、10個②）、亀戸天神社（亀戸3、6個）などの神社です。

※

力石には、重さや奉納した者の名前、年月日を刻むものが多く見られます。重さが刻まれる場合には、三十貫（約112・5キロ 1貫は約3・75キロ）などと表示されます。

また、力持ちに参加者した人の名前が奉納者として刻まれたものもあります。例えば亀戸天神社に奉納された力石には、神田明神下（千代田区外神田2）の酒屋、内田屋の奉公人であった

内田金蔵と八丁堀亀島（中央区日本橋茅場町2・3）の平蔵の名前が刻まれています。2人は江戸近郊だけでなく、房総地域にも名前が確認され、活動範囲の広さがうかがわれます（高島慎助『東京の力石』等）。一方で、深川幸三郎、扇橋三治郎、佐賀文八、四十町力蔵など、区内地域名を冠した名前も確認できます（富賀岡八幡宮、中田稲荷神社）。その他、江戸中期の狂歌師・戯作者として有名な太田蜀山人（南畝③）や書家三井親孝（親和の子④）など、文化人が書いた文字を刻んだものもあります（亀戸天神社）。



③「臥龍石」 蜀山人書 亀戸天神社



④「奉納 天満宮」 親孝書 亀戸天神社

皆様も神社を訪れる時には力石を探してみてもいかがですか。

（文化財専門員 功刀俊宏）

刊行案内

『Hunkonenin』

「江東区文化財まっぷ」

江東区の歴史・文化財を案内する「文化財まっぷ」の改訂版を刊行いたしました。内容をさらにパワーアップさせ、充実した構成になっています。情報更新だけでなく、「江東区の川と橋のいまむかし」、「埋め立ての歴史」江戸から現在まで、「にしき絵にみる こうとう・描かれた名所」、「歌舞伎と関連文化財」のテーマを設け解説しています。また、平成8年刊の『下町文化探訪』（品切）に掲載し、大変好評を得た町名の変遷図も復活させました。

ぜひ、一度ご覧ください。

【頒布場所】

文化観光課文化財係 （区役所4階）
こうとう情報ステーション（区役所2階）
芭蕉記念館 （常盤1-6-3）
深川江戸資料館 （白河1-3-28）
中川船番所資料館 （大島9-1-15）
深川東京モダン館（門前仲町1-19-15）

計報

・江東区登録無形文化財（工芸技術）「仕舞袴製作」保持者杉浦武雄氏は、去る平成26年12月28日にご逝去されました。ここに慎んでご冥福をお祈り申し上げます。